



大阪府立三国丘高等学校

三丘百年

■発行日 一九九五(平成七)年十二月十二日

■編集 大阪府立三国丘高等学校
記念誌委員会

■発行 大阪府立三国丘高等学校
創立百周年記念事業委員会
堺市南三国ヶ丘町二丁目二番三十六号

■印刷 凸版印刷株式会社

大阪市福島区海老江三丁目二十二番六十一号

編集余話 ◆ユーカリからアカシアへ

(一)卒業文集にみえるユーカリとアカシア

卒業文集が、校友会雑誌『茅渟の海』に掲載されるようになったのは一九〇六(明治39)年からである。そのためこの時期から、卒業生の脳裏に焼き付けられた学校生活の印象が、母校への思い出として系統的に記録・蓄積されることになった。各卒業文集に見える思い出の樹木名を追跡すると、大正期には、ユーカリがアカシアとともに頻出し、「我輩等のシンボル、あのユーカリ樹」(『茅渟の海』第41号、大正8年)とあるように、ユーカリは本校の象徴であった。『第三十二回卒業記念写真真帖』(昭和6年3月卒)によると、正門内側と運動場に面した本館南側に、それぞれユーカリとアカシアの巨木が一对となって、さながら本校を象徴するかの如く写っている。

卒業記念文集に初めてアカシアが見えるのは、『茅渟の海』第36号(大正4年)

であり、そこには「今学校を去らうとしている一人の少年はアカシアの樹に靠(もた)れて潤んだ目であたりを見ながら黙想に耽つて居る」とある。また一九二一(大正10)年の文集には、アカシアを題目とする作品が初めて現れる(『茅渟の海』第43号)。ついで大正11年には、「クローバーの上の楽しかった学友の集ひ或はアカシアの花咲く下のそぞろ歩き」の如く、アカシアとクローバーとが初めて対になって見え(『茅渟の海』第44号)、さらに昭和期に入ると、これらがユーカリに代わって象徴としての位置を占めていく。一九三〇(昭和5)年になると、アカシアが文芸雑誌名『あかしや』に採用され、また昭和七年には文集の中に「アカシアとクローバー」を題目とする作品も見られる。文集では「アカシ

ヤの並木に囲まれた運動場」「アカシアの堤」「アカシアの蔭」等と表記され、運動場を取囲むコの字型の土堤の上に、アカシアが並木をなして繁っていた状況が描かれている。『第三十五回卒業記念写真真帖』(昭和9年3月)には、そのようなかつてのアカシアの木と堤の貴重な写真が掲載されている。

なおアカシアは俗称であり、えんじゅに似て針があるため、正式には「にせあかしあ」(はりえんじゅ)と呼ぶべきであると考えられている。学名は「Robinia pseudo-Acacia L.」であるので、日本



アカシアの林(昭和9年卒業アルバム)

語表記はアカシアが正しく、アカシアは読癖にしたがったものである。ただし、本校の校友会雑誌では、そのほとんどがアカシアと表記されている。以下本文では、引用した場合のみ原文通りアカシアと表記する。

(二)あかしや(アカシア)句会の命名

アカシアの名が組織に冠せられ、長く存続したものに、あかしや(アカシア)句会がある。句会はすでに大正期から耳原句会として活動していたが、昭和6年より「あかしや句会」と改称されている(『茅渟の海』第53号、昭和6年6月刊)。その経緯は不明であるが、当時より俳句指導の一人であった離外丸井貞男(教諭)の「アカシアの花を見上げてする暗記」に因んだことは確かである(『丘学芸』第27号、昭和17年刊)。

(一)で述べたように、当時アカシアは

本校の象徴となっており、そのアカシアが昭和五年から開始された校舎改築にともない次々と伐採され、「それ等の並木が惜し気も無く、一本、二本と切り倒された時は誰もが盡きせぬ名残りを惜しむ様に悲しんで居た」（『茅渟の海』第55号）、「運動場の周囲を取りかこんでいたアカシヤの木が次々と切り取られてゆくのを見て惜しくて惜しくてたまらなかつた」（『茅渟の海』第54号）という状況が現出した。おそらく、切り倒されていくアカシヤの並木をいとしむ気持ちに契機となつて、昭和6年に命名されたのであろう。昭和6年3月卒業の第32期同窓会の会誌名が『あかしや』（阿か志や）であるのも偶然ではあるまい。

（二）アカシヤの四季と学校生活

校舎改築にともなうアカシヤ並木の伐採が契機となつて、新句会名が生まれたように、アカシヤは明治期築造の

旧校舎と一体の関係にあつた。旧校舎が解体され、一部残つたアカシヤに対して、当時五年の前田佐巳は、「ああ!! あのなつかしの校舎はその姿を没してしまつた。然し今残っているのはあのアカシヤの木と庭園の樹だけである。そのアカシヤに向つて僕はかく叫びたい。『アカシヤよ堺中の存在する限り生存せよ』しかしアカシヤも命あるものです。いつかは彼も死んでしまふでせう。皆さんあのアカシヤを愛してやつて下さい。あれは堺中の名物なのです」と、悲痛に訴えている。

四季の学校生活もアカシヤと共にあつた。当時4年の沢田孝明は、「旧校舎雑感」の中で、「初夏のにはひかむばしきアカシヤの木陰にて友達と青き若葉の光線を受けて共に文読み亦相談せしあの光景忘れ得ず。青き若葉のアカシヤの並木の下誰しも旧校舎に学びし者の体験せしもの也。アカシヤの若芽出て淡く堤に蔭落して春過ぎ、希望にもゆ

る新入生をむかひ、若葉日増に濃さを増して夏来り、学生生活の最も楽しき夏休を呼び、青緑にと変じて黄となり一陣の風之を落して運動場に秋をまき、寒風来りて之を吹き追ひ秋深まり、梢淋しく風にゆらぎて冬となる、吾等校舎の四季は蓋しアカシヤによりて呼び起されしものなり」と回想している（『同』）。

短歌や俳句にも、季節感一杯にアカシアを詠みこんだものが散見される。

○アカシヤの青き若葉は曇り日の

銀の光を受けて動かず

○いつしかに白きアカシヤ散りたまり

教室のほよりは夏になりたり

（以上『白光』）

○逝く秋を散る寂しさよアカシヤに

よれば何かを失へるごとし

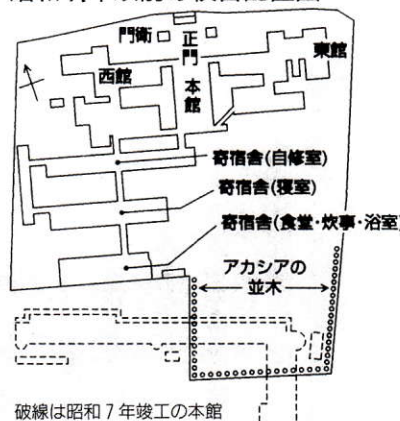
（『翹望』）

○冬の日にはやアカシヤに傾きて

友うつまりのつかれけるかも

（『あかしや』）

昭和7年以前の校舎配置図



破線は昭和7年竣工の本館

注①校舎配置図は、大きさの違う『明治36年大阪府立堺中学校一覽』所載の平面図と、『昭和7年大阪府立堺中学校一覽』所載の平面図とを、同一規模に縮小し合成したものである。

②アカシヤの並木は土堤の上であり、その配置は『第32回卒業記念写真真帖』（昭和6年3月卒業）所載の航空写真による。

卒業に際しては、アカシアを擬人化し、それと対話する作品（『あかしや』や、それを「校舎の裏のアカシヤの老人」と呼び、この老人をいたわり「相も変わらずアカシヤのぢいさん青く繁つている」ように可愛がつてほしいと後輩に言い残している作品もある（『蒼空』）。

○アカシヤの伸びにし今日や
われ去りぬ （『あかしや』）